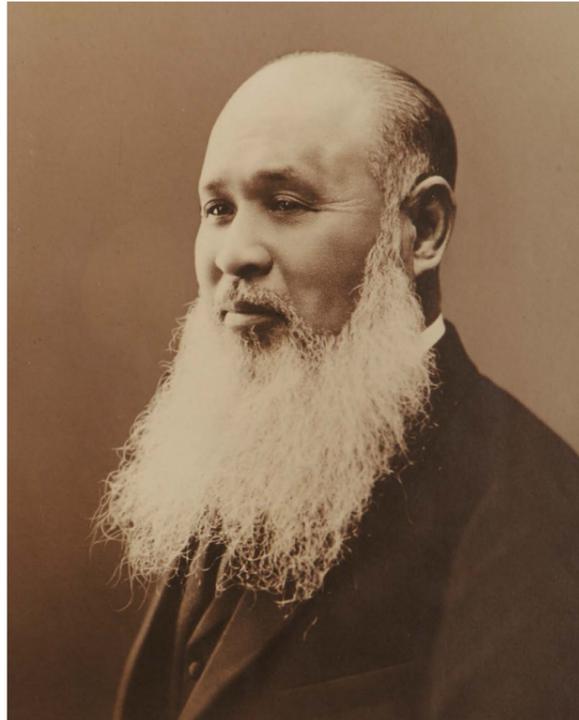


「製糸王」と呼ばれた事業家

か ね た ろ う
二代 片倉兼太郎
(1862～1934)



生い立ち

二代片倉兼太郎(幼名佐一)は文久2年12月24日、市助の四男として信州諏訪郡川岸村の寒村に生まれた。このとき父の市助40歳、長兄兼太郎は14歳、次兄光治は11歳、姉しゅう8歳、3兄五介4歳で、この子供5人と両親のそろった片倉家はにぎやかなものであった。彼は大家で名主をつとめる、片倉家の末手として幸福な幼年時代を送った。佐一が生まれた文久2年には、将軍徳川家茂の上洛があり、3歳になった元治元年には京都蛤御門の変があり、長州征伐があった。またこの年11月には、京都をめざす水戸の浪士武田耕雲斎が、約800

の兵をひきいて諏訪を通過した。諏訪への入り口和田峠で戦いが行なわれ、これを迎え撃った高島、松本両藩の軍勢は破れ、浪士軍はこの川岸村を通り伊那路へぬけて行った。

彼もまた母の背中で、この時代の大きな波音を聞いていた。慶応4年には徳川幕府が崩壊し、明治新政府が誕生した。このころ彼は村内真福寺の寺小屋にはいり、孝経をはじめ四書五経を学び、また手習いをした。ここからさらに進んで、隣村平野村の浜雪堂の門にはいり、2年間漢学と書道を学んだ。

明治4年10歳の時、雪堂のすすめで東都に出で、島田篁村の双桂精舎に入塾した。篁村は後に東京大学

教授となった人である。彼はここで自分の将来について考えめぐみ、そして彼は、篁村のもとを辞し故郷へ帰る決心をした。

片倉組

安政の開港以来約70年間、生糸はわが国輸出品の首位を占めていた。明治政府は殖産興業の重点の一つとして、製糸業の発展に力を入れ、明治5年には上州富岡に、フランス式機械製糸工場を建設した。このころ諏訪地方でも製糸事業熱が高まり、家内工業的製糸が盛んに行なわれていた。片倉家もその一つで、明治6年には自宅庭前で座繰り10人取りを始めていた。佐一の12歳の時である。

片倉一家は長男兼太郎の下に一致協力、明治11年には村内垣外(かいと)地籍に、32釜の洋式機械工場を建てるに至った。地名にちなんで垣外製糸所といったが、これが片倉製糸の第1号工場で、これから後次々と工場ができていった。

明治12年には片倉が中心となって開明社を組織し、生糸の共同出荷を行なった。23年には信州の中心松本に進出して松本製糸所をつくり、五介がこれを主宰した。続いて27年には村内に360釜の三全社(後の川岸製糸所)をつくり、佐一が所長となった。当時官営の富岡製糸所がようやく300釜であったから、この三全社は日本一の大規模なものであった。

本家の兼太郎には子供がなかったので、早くから末弟佐一(のち二代目兼太郎となる)が順養子となっていた。そして長男兼太郎は片倉の総帥として、家業の采配を振っていたが、また村長はじめ公職に携わることが多く、製糸のことはもっぱら佐一が中心となり、兄光治、五介(今井家を継ぐ)その他同族の協力のもとに運営されていた。

明治27・8年戦役の勝利は、わが国経済界に一大発展の気運をもたらし、製糸業界でも大規模な工場が続々と新設されていった。片倉一族もこうした時機に一大飛躍をはかるべく、本家兼太郎を組長として片倉組を組織し、また中央進出の便宜のため東京市京橋区に東京支店を設けた。一方、五介は中国大陸に渡り、また台湾にも行き、現地の蚕糸業をつぶさに視察して将来の大陸進出に備えた。

明治37・8年戦役はさらに躍進の転機となった。とくに戦争終了と同時に中央線が開通したために、諏訪地方の製糸業者は莫大な恩恵を受けるに至った。

片倉組もまたこの期に拡大躍進し、明治末年には長野県下に11工場をもち、県外では大宮、八王子、仙台、熊谷、愛知一の宮、山形両羽等にまで工場をもち、朝鮮にも進出して大邱、全州、京城、咸興等にまで工場をつくるに至った。また大陸の青島にも日華蚕糸株式会社を設立した。

